

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 13日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530631

研究課題名（和文） 認知症の非薬物療法；夫婦間ライフレビューの開発

研究課題名（英文） Developing a couples life review intervention as a non-pharmacological treatment of dementia

研究代表者

加瀬 裕子（KASE HIROKO）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：30296404

研究成果の概要（和文）：

<目的>本研究では、認知症患者と介護者である配偶者に同時に介入する事で、認知症の非薬物療法としての効果が存在するとの仮説の基に、「夫婦間ライフレビュー」を開発し検証することを目的とした。

<方法>認知症の要介護者とその配偶者に毎週1時間ずつ、計6回、セッションを行い、写真本（ライフレビュー・ブック）を作成した。3回の測定により、その効果を評価しつつ、効果的で実施可能性の高い「夫婦間ライフレビュー」の方法を開発した。

<結果>7組の研究協力者に対し、簡易版「Couples Life Review」を実施した結果、家族介護者の在宅介護継続意思の促進を促す傾向が見られた。t(6)=2.30.p<.10。

研究成果の概要（英文）：

< Objectives > To develop a couples life review intervention as a non-pharmacological treatment of dementia

< Study Design > A six session intervention was conducted to facilitate conversation of the elderly with dementia and spouses. Before the each session, both of them were requested to work together to collect ten pictures showing each period of their lives. During the session, the couple was interviewed at their own home about each stage of their lives. All of pictures and comments integrated into a life review book.

< Methods > The difference between before and after the intervention was measured by Philadelphia Geriatric Center Moral Scale, QOL-AD, Geriatric Depression Scale, Dyadic Relationship Scale, and J-Zarit Burdun Inventory.

< Results > Analysis of 7 couples completed the sessions showed caregivers' intention of continuing care at home was strengthened. t(6)=2.30.p<.10

< Conclusion > This study demonstrated the developed couples life review intervention may represent a worthwhile approach to improving the length of care for the elderly with dementia at their home.

交付決定額

	直接経費	間接経費	合計
24年度	1,100,000	330,000	1,430,000
23年度	800,000	240,000	1,040,000
22年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学  
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学  
キーワード：認知症・夫婦間ライフレビュー

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の意義

認知症患者が在宅で生活するためには、家族介護者が大きな役割を果たすが、三世代同居の減少と共に、夫婦のみの世帯が増加し、介護する配偶者もまた高齢者となっている。こうした事態は、「老老介護」という用語を生み出し、「認知症高齢者の老老介護」が社会問題化している。

### (2) 先行研究の成果

これまでの先行研究から、以下のことが明らかになっている。

アルツハイマー病とその他の認知症は、患者達の記憶力の機能と介護者との関係に多大な影響を及ぼす。記憶の喪失とその結果として起きる人間関係の変化は認知症患者とその介護者双方にとって痛烈な結果を招く事もある。

(Mittelman, Eostein&Pierzchala;2003)

認知症の高齢者が記憶を失うに連れ、介護者達は患者との意思の疎通の困難さを経験し、患者との距離を感じるようになる。介護者達が患者に対して、寂しさを感じていたり、焦っていたり、重荷に感じている時、認知症患者は周りに理解されていないと思う様になり、自分の気持ちを口に出す努力を怠るようになる事もある。(Gentry&Fisher, 2007)

介護者が患者の配偶者やパートナーであった場合、コミュニケーションや過去の親密な関係の喪失という、ネガティブな影響により、事態はより深刻となる。(Rankin,Haunt,& Keefover,2001) それはまた同様に、介護者にとってさらに困難な重荷となって、介護負担を増大させることにもなる。最近、増加している、家族介護者による虐待・殺人など悲惨

な事件も、多くが介護者の心理的負担に起因している。

## 2. 研究の目的

### (1) 非薬物療法としての夫婦間ライフレビューの効果測定

本研究は、認知症患者と介護者に同時に回想法を行なうことで、記憶の再強化、コミュニケーションの再構築、介護者の負担の軽減に取り組むものである。こうした非薬物療法が認知症の治療にとって効果があることは、医療・介護現場では経験的に知られている。この Experience-based な知見を Evidence-based の知見とするために、本研究では、先行研究で実証されている3つの実験的要素を組み込んでいる。

- ① インタビュー調査者は過去の記憶を呼び起こさせる様な構造的質問 (structured life review questions) を年代順に行うことによって、患者と介護者相互の会話を促進する。(Haight & Haight,2007)
- ② 夫婦は協力し、過去の記憶を分かち合い、写真の中から自分達に取って特別に意味のある写真を選び出し、ライフレビュー・ブックを作成する。(Allen,Higeman,Ege,Shuster&Burgio,2008)
- ③ 介入者がコミュニケーション技術 (例、質問をする事、記憶を促進する為に写真を使う事、相手に理解を示す為に相手の言葉を言い換えて返答する事)をコーチすることにより、夫婦間のコミュニケーション度を高める事である。(Burgio et al.2001)

上記の三要素によって構成することによ

り、夫婦間ライフレビューは効果を発揮すると考えられる。認知症の非薬物療法としての夫婦間ライフレビューの効果を検証することが本研究の目的である。

## 2. 研究の方法

本研究は、当初は夫婦間ライフレビュー（完全版）の実施を試みたが、研究協力者が統計的分析を行えるだけの実数を満たさなかったため、研究1では完全版についての質的分析を中心とした。さらに（簡易版）を作成して研究2を実施した。

### （1）研究1の調査対象者と実施時期

在宅の診断後認知症高齢者と配偶者である介護者夫婦5組の研究参加者を得た。

対象者選定の委託先としては、東京都、埼玉県、神奈川県 の13箇所に訪問説明した後、該当者の連絡を受けた7ケースの内、5ケースに対して実践を終了した。実施時期は、2010年5月から2011年9月である。

### （2）研究1の対象者夫婦の基本属性

- ①認知症本人 性別、年齢：平均 72.4 歳（67-83 歳/男性 2、女性 3）
- ②介護者 性別、年齢： 平均 71.2 歳（67-81 歳/男性 4、女性 2）
- ③学歴： 男性 5 名大卒、女性 5 名高卒
- ④職歴： 男性 現職勤務 1 名、退職 4 名  
女性 主婦 5 名
- ⑤結婚歴： 平均 46.6 年（41-56 年）
- ⑥認知症介護歴： 平均 4 年
- ⑦家族構成： 子供（独身長男）同居 1 組、夫婦のみ 1 組、子供別居夫婦のみ 3 組
- ⑧対象者診断名：アルツハイマー病 5 名
- ⑨MMSE： 中等度（平均 15.6）3 名、重度（測定不可）2 名
- ⑩コミュニケーションレベル： 会話困

難、理解不能 1 名、会話困難、相槌・発話時々あり 1 名、会話可能部分あり、理解不十分あり 2 名

会話及び理解やりとりでいたい可能 1 名、

### （3）研究1における夫婦間ライフレビューの試験的实施

インタビュー調査者は、毎週1時間ずつ、調査協力者の夫婦と一緒に、2人の人生を連結させた写真本（ライフレビュー・ブック）を作成するために自宅を訪問した。

セッション1～3では、インタビュー調査者は、対象の夫婦に、一緒に過ごしてきた人生の思い出を、年代順（「出会い」「新婚時代」「中年時代」「最近」）に、構成された質問により引き出し、話し合う。セッション毎に、夫婦は特定のコミュニケーションスキルを教わり、練習をする。習得したコミュニケーションスキルを使いながら、会話を楽しむ。セッション4～5では、ライフレビュー・ブックに使用する写真を選ぶ事に専念する。インタビュー調査者は、写真の見出しを考え、2人の過去の話を書き留めた。

6回目に完成したアルバムを贈呈。アルバムを見ながら最後のライフレビュー実施。

調査員は、早稲田大学大学院人間科学研究科老年社会福祉学研究室の大学院生が行った。

### （4）倫理的配慮

全対象者に対して文書で研究の目的、内容、精神的不安定になる可能性もあることについて説明し、セッションの途中であっても中止できること、個人情報秘匿は厳守することを説明した後に、文書で参加同意を得た。なお、本研究は早稲田大学の人を対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得て実施した。

表1 インタビュー項目

夫婦の段階	提示写真・物	質問項目(一部)
出会い～	二人の好きな写真	・二人の好きな写真を見ながら自由に夫婦の思い出語りを話していただく。(出会い～)
新婚時代	新婚時代	・どうやって知り合ったのですか？ ・どういう前に着かれたのですか？ ・結婚式にどんな思い出がありますか？ ・新婚時代はどこにお住まいでしたか？ ・お子様はいらっしゃいますか？ ・生まれた時や小さい頃のエピソードは？ ・新婚時代思い出に残る出来事は？
中年時代	中年(子育て)時代	・お子様の成長時期の思い出は何ですか？ ・お子様の10代はどんなでしたか？ ・子育てを楽しみましたか？ ・この頃はどこにお住まいでしたか？ ・特別な思い出のある大切な方はいらっしゃいますか？ ・どんななお仕事をされていましたか？ ・ご家族のことはどなたがなされていましたか？ ・お二人一緒に楽しいことがありましたか？ ・旅行や出かけられた思い出はありますか？
最近	最近(5～10年位)	・退職されていますか？ ・退職はお二人にとってどんな経験でしたか？ ・今一番親しいと感じている友達は誰ですか？ ・お二人一緒にいるときは何をしますか？ ・別々にいるときは何をしますか？ ・最近の楽しみは何ですか？ ・長い結婚生活の中で、最初は気付かなかった相手のことでだんだんわかってきたことはありますか？ ・これから先の人生でしたいことや望んでいることは何ですか？ ・人々にお二人についてどんな風に覚えておいてほしいですか？
	完成したアルバム	・完成した二人の物語のアルバムを見ながら、自由に感想や気持ちを話していただく。

ミシガン大学「Couples Life Story」各段階のライブレビューでの質問の手引き訳より

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究1の分析結果

ライブレビューの効果は、夫婦一緒に楽しめる場作りであり、介護者にとっては、認知症配偶者との夫婦の人生をこれでよかったと整理する意味を持つ事が示されていた。

(表2参照)

##### (2) 研究1の結果から抽出された課題

研究1で十分な数の協力者が得られなかった背景には、以下のような問題が存在すると思われた。

- ①研究対象者の負担が大きく、選定・確保が難しい。
- ②インタビュー実施者の負担が大きい。
- ③実施者が大学院生レベルの専門的知識経験保有者に限定される。
- ④アルバム作成にPC、スキャナー、プリンター等の電子機器が必要であり、その場でできない。

表2 介護者インタビュー意識概念抽出と対象ケース

の語り

概念番号	類型	概念	C1	C2	C3	C4	C5	アルバム
1	介護者の自己意識	ひとつの転機(人生の整理)		19				0
2		人生のまとめ	37	112				
3		社会貢献	6		16			
4		過去への抵抗と不安	21,22,23,27,34					
5		乗り越える意識(深)土壁に暮らす意識(浅)	11,50					
6		認知症だから得られず機会	44,49,52					
7	認知症配偶者への意識	配偶者理解と感謝(共感と対応)	4,11,12,13,16,28	13	14,20	37		0
8		認知症になっても伴侶(本人への気持ちの委縮はない)	20	10,12				
9		未来への希望	37,52	27,30,32	11,12,21		7	0
10		妻失からの再評価(新たな発見理解)	1,53,54					
11		苦悩、不安への気づき(どこかしまいに思える気持ち)	52,59	4		31,32,40		
12		記憶歪曲からの脱出ツール	14,15,16,17,32					
13		妻失への不安(病人認識)					4,6,8,9,10,11,19,24,29,3,6	
14		妻失への怒り(聞けないアルバム)					13,15,17,30	
15	夫婦関係への意識	夫婦共に生きよう意識	11,51	11	5	30		0
16		1冊に詰められ夫婦の思い出(旅費で得られず宝物)	29,55,44,50,51	11	51,6			0
17		二人の記憶の共有と共感(心安まる事)	41,51,51	7	4	23,30,36		0
18		幸せな人生への自覚	51	11,11	5	5		0
19		夫婦の過去への愛着	36,39,45,51		13	34		0
20		夫婦の会話ができない					33	
21	周囲への意識	子長(患者)評価	23,24,25,16,20			6		0
22		子長との記憶の共有	24,45,47,53,54,55		24,25	23		0
23		周囲とのコミュニケーションツール			56,7,11,23,26		25,26,27	0
24		理解と見守る暮らしツール	21		11,2,15			0
25		介護現場でのアルバム活用			19			0

この4点の改善の必要性と同時に、介護者の理解を促進する効果についても示唆されたので、アルバムを認知症患者に関わる介護スタッフ(デイサービス、ショートステイの介護スタッフ)で共有し有効に活用できる可能性があることが明らかになった。そこで、簡易版ライブレビューを開発する研究2を実施することにした。

(2) 研究2の実施

簡易版「Couples Life Review」の概要は、家族介護者と認知症配偶者が一緒に二人の思い出の写真を選び、その写真に家族介護者がコメントをつけ、写真と共に認知症配偶者のデイサービス利用時にデイサービスの送迎担当者に渡す。デイサービスでは、大学生が傾聴ボランティアとして写真を認知症配偶者に見せながら話を聴き、その内容から認知症配偶者のコメントを作り、さらに写真と両者のコメントを用いてその場でアルバムを作成する。認知症配偶者はその日のうちにアルバムを自宅に持ち帰る。というものである。1日に扱う写真は5枚で週1回の間隔で6週間行う。

(3) 研究2の方法

6回のセッションの内容は、完全版と同様であるが、家族介護者は同席せず、コメントでインタビューを代替した。

効果測定調査は、事前・事後・2週間後の3回行い、項目は以下の通りである。

- ① 属性 (事前アンケートのみ) 5項目  
性別、年齢、婚姻期間、介護年数、家族からのサポートの有無
- ② 在宅介護継続意思 7項目  
(Couples Life Review の結果より加瀬研究室作成)
- ③ 夫婦関係尺度 3項目  
(Spanier 1982 : 加瀬研究室訳)
- ④ 介護負担尺度 22項目  
(Zarit 介護負担尺度日本語版: 患者をご主人(奥様)に置きかえて使用)
- ⑤ QOL\_PGC 21項目  
(モラル尺度を一部改編)
- ⑥ 主観的健康感 1項目
- ⑦ アルバム尺度 13項目  
(Couples Life Review の結果より加瀬研究室作成) 事後・2週間後のみ

⑧ 自由記述 (事後・2週間後のみ)

また同時に、学生や介護スタッフへの影響を調査するために、学生や介護スタッフへのインタビュー調査を行った。

(4) 研究2調査対象者

分析対象家族介護者は女性5名、男性2名、平均年齢78.6歳、平均婚姻期間55年、平均介護期間2.9年で、家族からのサポートのあるものが5件、ないものが2件であった。認知症配偶者の平均年齢は82.9歳、平均介護度は3、MMSE得点の平均は9であった。

表3 調査対象者の属性

家族介護者						認知症配偶者			実施者		デイサービス		特記事項		
ID	性別	年齢	婚姻期間	介護期間	他家からのサポート	ID	配偶者年齢	配偶者介護度	MMS E	ID	属性	ID		定員数	
A	女	75	52	1.5	無	Ap	78	4	25	Am	学部生(1年)	Ad	40	認知症介護施設	
B	女	70	50	4	有	Bp	80	4	0	Bm	学部生(1年)	Bd	12		
C	女	84	60		有	Cp	88	3	17	Cm	学部生(2年)	Cd	9		
D	男	76	50	4	有	Dp	80	1	7	Dm	学部生(1年)	Dd	15		
E	男	88	65	1	有	Ep	88	2	3	Em	学部生(1年)	Ed	40		
F	女	73	48	6	無	Fp	75	4	0	Fm	看護師	Fd	10		
G	女	84	60	1	有	Gp	84	3	11	Gm1	学部生(1年)	Gd	40		
										Gm2	学部生(2年)				
H	女	86	60	13	有	Hp	88	3	12	Hm	社会福祉士	Hd	45		継続中
I	女	85	61	6	有	Ip	88	4	12	Im	社会福祉士	Id	45		継続中
J	女	80	54	4	無	Jp	82	1		Jm	介護福祉士	Jd	45	継続中	
K	女	76	54	1.5	有	Kp	80	1	18	Km	看護師	Kd	100	継続中 通所少	

(5) 分析結果

アルバムが完成している7例について、セッション開始前と第6回終了時(セッション終了時)の質問紙調査結果に対して、対応のあるt検定を行った。その結果を表4に示す。

表4 対応のあるt検定の結果

	セッション開始前 平均値	N	セッション終了時 平均値	N	t値
在宅介護継続意思	3.90	7	4.48	7	-2.30 *
夫婦関係	3.29	4	2.96	4	2.03
介護負担	1.27	7	1.24	7	0.19
QOL_主観的幸福感	0.60	6	0.71	6	-1.28
主観的健康感	3.83	6	4.00	6	-1.00

\*p<0.10

全項目で家族介護者の平均点が好ましい方向に増加しているが、統計的にセッションの前後で有意な差がある傾向が見られたのは在宅介護継続意思のみであった。

(t(6)=2.30.p<.10)

(6) 結論

簡易版「Couples Life Review」において、10%の有意確率ではあるが、在宅介護継続意思に有意な正の変化が見られた。このことから、簡易版「Couples Life Review」が「Couples Life Review」の汎用化に資する取り組みであり、「Couples Life Review」を多くの場で多くの人に提供できる可能性を提示できたものとする。

インタビュー調査の結果から、実施者の汎用化については、デイサービスのスタッフによる実施は現実的ではないことが明らかになったが、一方で大学生のデイサービスでの実施は、デイサービス側からも積極的賛同が得られることが示唆された。さらに、本研究で見られた大学生実施者と家族介護者の交流から、簡易版「Couples Life Review」は、閉塞的になる認知症家族介護者にとって閉塞感を軽減できる可能性も示唆された。

【謝辞】お忙しい中、調査にご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1 加瀬裕子 多賀努 久松信夫 横山順一：2012 認知症ケアにおける効果的アプローチの構造—認知症の行動・心理症状(BPSD)への介入・対応モデルの分析から—, 社会福祉学, 53(1), 3-14頁 (査読有)

2 加瀬裕子, 久松信夫：2012 認知症ケアマネジメントの開発的研究—行動・心理症状(BPSD)改善を焦点として—, 介護福祉学, 日本介護福祉学会 19巻2号:157-165頁(査読有)

〔学会発表〕(計3件)

1 Kase H : The effect of intervention for improving Behavior and Psychological Symptoms of Dementia in elderly people in

Japan, 2010 Joint World Conference on Social Work and Social Development 2010/06/10 (Hong Kong, China)

2 牧野恵理子、山村正子、崎山香織、加瀬裕子：2012 在宅の認知症患者と介護者夫婦への「Couples Life Review」による有効性検証—介護者意識の変容に焦点を当てて—、日本老年社会学会第54回大会、老年社会科学34巻 2号 185頁

3 Kase H: Behavioural and Psychological Symptoms of Dementia and Effective Interventions,

2012 Joint World Conference on Social Work and Social Development 2012/07/09 (Stockholm)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

加瀬裕子 (KASE HIROKO)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：30296404

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし

## 【参考文献】

Burgio et al, Judging Outcomes in Psychosocial Interventions for Dementia Caregivers: The Problem of Treatment Implementation. Gerontologist 41(4): 481-489. 2001

Gentry, R.A. & Fisher, J.E. Facilitating Conversation in Elderly Persons with Alzheimer's disease. Clinical Gerontologist 31(2):77-98. 2007

Haight, B.K. & Haight, B.S., The Handbook of Structured Life Review, Baltimore; Health professions Press. 2007

Mittelman, Eostein & Pierzchala Counseling the Alzheimer's Caregiver: A Resource for Health Care Professionals American Medical Association, Chicago, USA, 2003

Rankin, E.D Haunt, M.W. & Keefover, R.W, Current Marital Functioning as a Mediating Factor in Depression Among Spouse Caregivers in Dementia. Clinical Gerontologist 23: 27-44. 2001